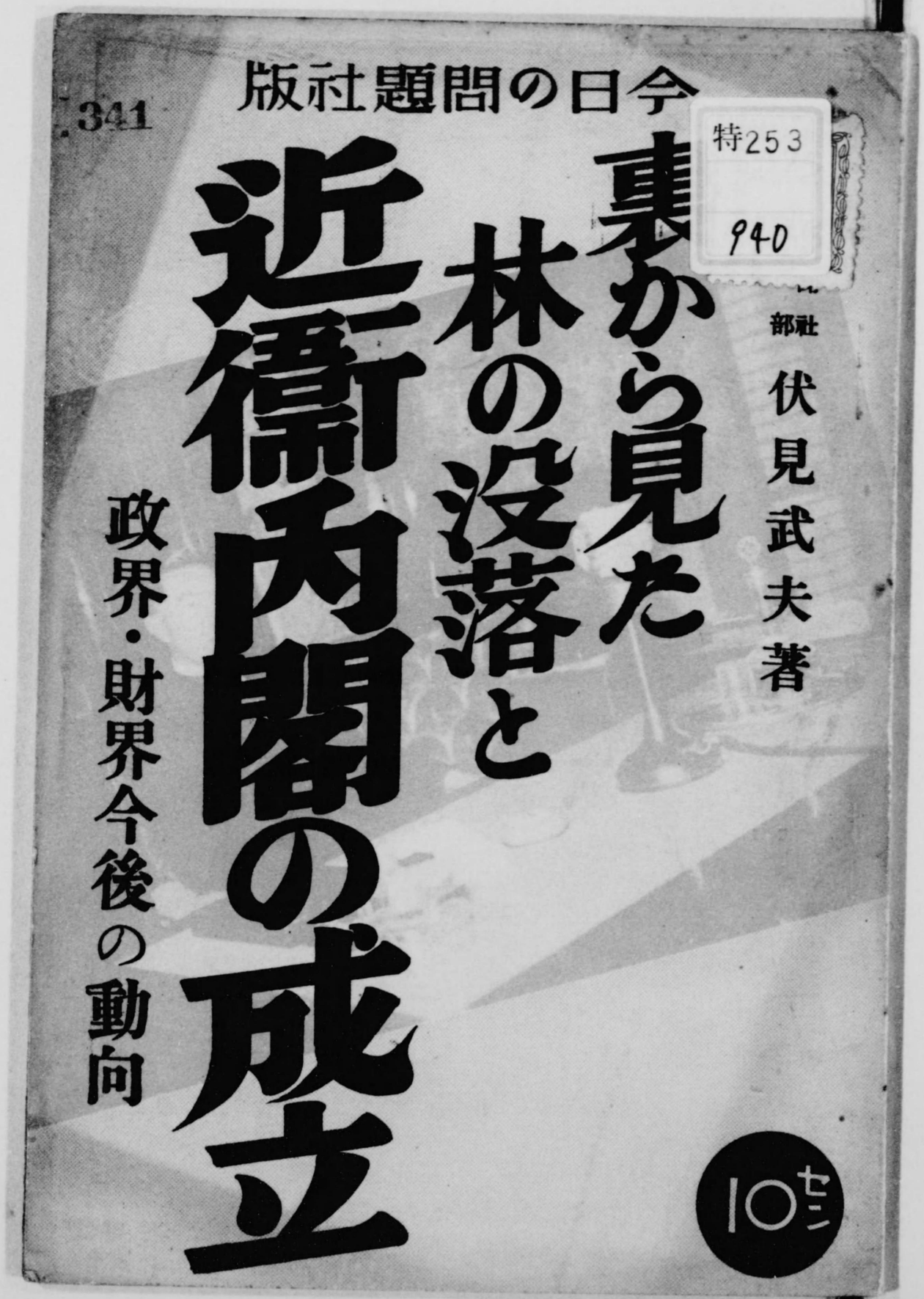


2

0004611000

0004611-000

特２５３－９４０

裏から見た林の没落と近衛内閣の成立

伏見武夫・著

今日の問題社

昭和１２

ABC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

特253
940

目次

◇、林内閣崩壞の原因……（三）
◇、林の誤算と閣僚の對立……（五）
◇、政黨の攻勢と對軍工作……（八）
◇、選擧法改正と林の態度……（一二）
◇、八方から見限られた林内閣……（一三）
◇、對外策の行詰りと政局不安……（一七）
◇、近衞内閣の成立と組閣事情……（二〇）
◇、新閣僚の入閣事情と政治的性格……（二三）

帝國大學 昭和十二年

◇、近衛內閣の運命と財政々策……（二七）
◇、軍部の動向……（二九）
◇、新黨問題の二つの行き方……（三〇）

裏から見た林の沒落と近衛內閣の成立

都新聞政治部記者　伏見武夫

◇林內閣崩壞の原因

林內閣は、御承知の通り五月三十一日に總辭職しました。國民の大多數は、林內閣の崩壞と云ふものを當然のことのやうに見て居ましたが、首相を初め閣內三、四の人々が特別議會に臨む强硬姿態を示して居つた爲に、總辭職の時機に付ては聊か唐突、且つ意外の感に打たれたのであります。

併し、三十一日に總辭職した裏面の經緯を探つて見ると、矢張りあゝ云ふ筋書になつては居

たらしい。辭めた最大の原因は、なんと辯解しても直接的には七十議會の解散にあつた譯ですが、解散したと云ふことは、後で如何に名分を變へやうとも、これは明かに林内閣——と云ふより、首相自身の政治的誤算に基くものであります。

林は三月三十一日に突如議會を解散致しましたが、どこまでが首相個人の自發的な意思で、どこまでが外部から誘導されたものであるかと云ふことは未だにはつきり致しませぬ。併し、昭和十二年度豫算が議會を通過した直後から、軍部の一角に解散論が徐々に擡頭して來て居つたことは事實であります。

今一つ、林を支持する政治革新協議會とか辛未同志會などの右翼團體に屬する在鄕將校の連中が同樣に林に解散を要求して居つたと云ふことも事實であります。

勿論、さうした要求なり、建策なりが、林を支持する軍部、右翼的方面にあつたとしても、林自身解散に因る政局の轉換を見透さなければ斷行できるものではない。林としては、解散が議會の政黨的分野に相當な異變を捲き起すだらうことを確信してゐたのではないかと思ふ。その證據には、彼は解散直後に平沼を訪問して諒解を求め、更らに近衛の私邸に赴いて、

『現在、政黨の分野には相當根强い新黨樹立の動きがあるから、自分としては固より非才、そ

の新黨を育てる任には堪えないけれでも、若し貴方に蹶起して戴けるなら、時局の爲に仕合せである。』

と云ふ打診や勸請もやり、又政黨出身閣僚の山崎若くは比較的政黨人に接觸の深い兒玉、斯う云つた閣僚達は、一時相當新黨樹立の方向に動きかけた形跡もあつたぐらいでした。

尤も、山崎、兒玉等の意圖して居つた新黨樹立と云ふのは、一と先づ、昭和會、國民同盟等の小會派を結集する、それに出來るだけ多くの中立議員を出す、政府として積極的にさう云ふ小會派若くは中立議員を援助すると云ふ態度を取れば、政民兩大政黨の中に、殊に政友會の中に相當動搖が起るであらう、選擧期間中は暫く別としても、選擧後に於てはその政友會内の動搖、他方に於ける小會派の結成と相俟つて議會で百名若くは百二、三十名の新黨を組織することは、必ずしも難事でないと云ふ目算であつたし、首相も解散後少くとも十日間位の間は、それらの閣僚の見透しなり、意見なりに左右されて居つたらしいのであります。

◇林の誤算と閣僚の對立

然るに、政黨の態度は、その政府首腦部の認識を裏切つて、益ゝ反政府的に高揚されて行つ

た。と云ふのは、解散は敵味方の區別なく、一應議會に對する彈壓である。何よりも、林內閣の議會無視、政黨否認的な傾向、一口に言へばファッショ的な傾向に對して、都市の意識的な分子を先頭とする國民の輿論と云ふものが著しく反政府的に硬化した。日頃の言動とか實際の肚の中は別として、選擧に臨む以上、代議士候補者たるものは、この國民の反政府的な意向に投ずるゼスチュアを示さなければ當選の可能性がない。從つて、この一月頃に林に參加せしめて新黨運動を計畫して居つた連中も、天降り解散の技術的錯誤の爲に、最早、林の下では新黨樹立の不可能なことを大觀して、解散究明、內閣打倒の立場を執つた。

例へば、民政黨の永井柳太郎の如きは、林との鄕里關係やら個人的な友交關係から云つても或は俗に政界で『荻窪會議』と稱して居る荻窪の有馬邸に於ける新黨計畫に加はつたメンバー同士であつたと云ふ意味から云つても、林に弓矢を彈くことは忍び得ないところであつたらしいが、選擧の際は民政黨幹事長として『政治家は戰ふ所に勝利があるのだ、憲政の本義に照して我々は最後まで今回の不當解散に抗爭する』と云ふ宣言を發せざるを得なかつたのであります。

獨り、林に解散を勸めた右翼團體——と云つても時局協議會系でなく、政治革新協議會系の

院內團體と見られる談交會の諸君は、多數の同志を立候補せしめ、國民同盟及び昭和會と共に資金の點にも惠まれて政府支持、既成政黨排擊をスローガンに、好機到れりとばかり戰つた。

斯う云ふ事態は、山崎、兒玉と云ふやうな政黨的色彩の强い閣僚は別として、他の一般の閣僚連中に、林が非常に危險な方面に引きづられて行つてゐるのではないかと云ふ批判と反省を起さした。

當初は結城藏相の如きも、小會派結成を中心とする新黨運動に何か發展性があるものゝ如くに考へて居つたが、事實さう行かないことを知つて漸次、中立的な立場に還元してしまつた。

林も、眼前の選擧の狀況を見て、益ゝ反政府的に硬化する政黨の態度から、新黨運動の速製を斷念して、同時に解散の理由を歪曲させて新黨の『シ』の字も言はずに、專ら時局認識を同じくする人々の當選に依る議會の質的甦生を待望する。それ以上何等政府に解散に就ての野心もなければ、目的もないと云ふ風に態度を變更させた。

見當違ひの解散が兎も角も林內閣を自殺に導いた見當違ひの一般的な、そして根本的な理由であります。

それでは、なぜ林が新黨樹立、政黨分野の異變と云ふことを待望した自分の考へ方の誤謬に

氣が付いて、總選擧直後に潔よく桂冠しなかつたかと云ふに、解散の建前を選擧の途中で變更したのであるから、今更、自分の誤算として退く事は甚だ不見識でもあり、同時に林の解散を希望した軍部若くは右翼團體の方では、即刻、林に身を引かれたのでは、政黨の俗に言ふ憲政常道論の前に政府が屈服したと云ふ印象を國民に與へることになると云ふ譯で、極力、林に頑張らせるやうなサポートを與へたためである。

勿論、新聞にも出て居つたやうに、總選擧後政府部内の二三の閣僚には、總辭職論を唱へた者がありました。これは後になつて判明したことですが、新黨樹立が出來ないならば辭職するのがよいと云ふ立場から兒玉、山崎等から總辭職論が出た。

併し、解散を首相が後で理窟づけた膺懲的、道義的意義に解釋し、それを遵奉して居る閣僚例へば伍堂、若くは鹽野、杉山陸相と云ふ風な人々は、兒玉、山崎の總辭職論に眞向から反對した。

◇政黨の攻勢と對軍工作

それは五月一日の閣議の席上と一般に言はれて居りますが、閣議前に首相が個別的に閣僚の

意向を訊いた時に出た話で、閣議に於ては、政府は專ら政策本位で特別議會に臨むと云ふ風に軟論派を抑へて一應體勢を整へたのであります。

併し、一旦閣内に生じた硬軟の對立と云ふか、龜裂と云ふか、それは外部からは、林内閣の末期的な症狀として問題視され、内部に異論が生ずるやうなこと自體が、林内閣の赤信號であると一層悲觀視されるに至つた。

かうした政府側の内部的脆弱性を看取してゐた政黨方面では、林内閣が特別議會に臨んで再解散を決行すると云ふことは、絶對に不可能だと見くびつては居たが、一刻も早く後退さす爲に、林内閣の背後勢力たる軍部方面に渉りを付ける必要があると云ふ譯で、林内閣打倒の政治的理由と云ふものを少し變へて來た。

一つは選擧中から言はれて居つたやうに、林内閣の非立憲的態度の攻擊であることは申すまでもありませんが、それに附加へて、軍に對するプロポーズとして、政黨は國防の充實と云ふことに付ては何の異論もない。寧ろ、それを支持して居るのである。

又、大陸政策と云ふことに付ても充分理解してゐる。政友會の如きは、大陸積極政策は我黨本來の主張であると云ふやうなことを外部に向つて放送すると同時に、鳩山代行委員の如きは

窃かに軍の中堅と見られて居る某少將の所に諒解を求める手續きを取つたり、或は民政黨の永井幹事長の如きも、梅津次官に會見を申込んだり、或は大麻總務の如きは軍務局當りに連絡を取つたりして、我々は行き懸り上林内閣は倒すが、決して反軍ではない。寧ろ、軍と政黨とは協力一致して、この非常時局を克服して行かうではないかと、先廻りして軍と政府の切斷工作に奔命した。

その爲に林首相や强硬閣僚などが、政黨が行懸りに囚はれてこの内閣を倒すのは宜しいが、併し、倒した後にどう云ふ形態の内閣が出現するかと云ふことまで見透して倒閣運動をやつてゐるのか、一層急進的な、右翼的な内閣が出來ると云ふ情勢を見誤つて居るではないかと言つて、政黨の倒閣運動を牽制しようとしたが、既に對軍諒解工作を進めつゝあつた政黨に對しては、政府の左樣な放送は何の効果もなかつた。

政黨は大手を振つて倒閣本部を造り、倒閣懇親會を開催し、實現は見なかつたが、全國的に國民大會を開くと云ふプログラムまで作つて居つた。

そこで政府の强氣と政黨の强氣と何れが先に腰碎けをみせるか、兩方にも色々複雜な事情があるので、結局常識的には押しの强い方が勝つと見られてゐた。特別議會に臨むと云ふことを

決定した後に於ては軟論派の閣僚も、政民の運動を倒閣祭と稱して嘲笑してゐたし、强硬派の鹽野法相の如きは非常に期する所あるやうな態度すら示して居つた。

林に到つては、明かに政黨の軟化は斷念してゐたが、政府が特別議會に臨んで再解散必ずしも不可能でないと云ふ決意を一時固めた。

◇選擧法改正と林の態度

その再解散の口實として選擧法改正と云ふことが取上げられて來た。これは軍の一部若くは右翼の建策であります。そこで、選擧法改正と云ふことが政局の前面に押出されて來た。最初に傳へられたことは、緊急勅令で選擧法を改正して議會を再解散すると云ふ戰術であります。

併し、緊急勅令と云ふのは、天災地變とか、議會を開くことの出來ない場合に、公共の安全若くは利益を保持する爲に緊急已むを得ざる處置として憲法上規定されて居る。それを開かれることになつてゐる特別議會に掛けずに、緊急勅令でやらうとしても、樞府が之を承諾する筈がない。

現に樞密院方面では、政府が議會に掛けずに、ともすれば勅令に依る形式を取りたがる態度

に對して、憲法の番人たる立場から相當問題を起して居つた。

その第一は鐵の輸入關稅免除を樞府にかけた時に、相當違憲論が起つて金子伯爵の如きは平素樞府の會議に餘り出たこともないのに、わざ〳〵飛出して來て、俺が憲法を作る時には斯う云ふ問題まで緊急勅令で出すと云ふことは考へても居なかつたし、明に違憲であると云つて、敢然として席を起つて歸つたと云ふ事實もある。

その後企劃廳の新設に伴ふ豫備金支出問題で又々樞密院方面に反對があつた。それは緊急勅令で選擧法改正をやると云つた樣な政府筋の宣傳に對する硬化した樞府の前哨戰であつて、政府に對する多分の政治的牽制が輸入關稅の問題でも、企劃廳の問題の時にも含まれて居つた。

それで企劃廳の官制及び豫算が樞府の本會議で最後の決定を見た日に、樞府議員の一部から林に向つて、政府は緊急勅令で選擧法改正をやると云つて居るが、果して左樣なことを考へて居るか、以ての外であると云はんばかりの質問が出た。林は考へて居ないと云ふことを言明した。これは當然の言明ではあるが、林支持の外廓的方面では、若し選擧法改正を、緊急勅令でやることに樞府が反對すれば、議員の任免權は政府にあるから、反對の樞府議員を更迭さして樞府と一戰を交へれば、政黨に倒されたと云ふ形を取らずに濟むと云ふ意見すらあつた位であ

るから、林のやらないと云ふ言明は、林支持者の間に尠からず失望を與へた。

そしてその頃から政黨方面のみならず、貴族院、其他の方面に於て、結局、政府は再解散はやれないではないか、從て、特別議會に臨む自信を失つのたではないか、と云ふ決定論が壓倒的になり、專ら政變の時機と云ふことが具體的對象となつて來た。

尤も政府は、表面ではそうした苦境裡にあつても、物價對策委員會を組織し、文敎審議會の委員を決めると云ふ風に、飽くまで特別議會に臨むと云ふやうな態度を示してはゐたが、敍上の事情を知つた者の間には、特別議會の召集期及び提出する法案を決定する六月十日前後が政變の有無を決定する分水嶺ではないかと云ふ風に見られ、專ら、その頃が警戒されて居りました。それが十日早く、三十一日に總辭職となつた、現象的ではありませうが、これが直接的透因をなしたのは、近衛公の車中談にあつたと觀測されて居ります。

◇八方から見限られた林內閣

近衛公は大阪からの歸途、記者團を擁して、『總選擧直後に政府が政民に對して閣僚の入閣を要求して、事態を緩和する手を打つではないかと考へて居つた。

然るに政府はその手を打たなかつた。今日となつて、この様に政府と政黨とが動きの取れない對立を示して居るとしたならば、最早、政府としては辭めるより外なからう、殊に外交關係に及ぼす影響は甚だ深刻なるものがある』――と、暗に一刻も早く政府が善處すべきであると云ふ意向を漏らした。

併し、これも一部では、近衛をして車中談の形式で語らしむるには、相當の事前工作が行はれて居つた。然も、それは政府部内にまで連絡があつた。詰り、將來の政治的生命を考へて居る兒玉あたりも加はつて居る。それを裏付けるやうな相當活潑な動きが重臣方面にあつた。それが近衛をしてあの時局談を語らしめた、斯う云はれて居ります。

近衛が慥かに政變の切迫を知つて居つたと云ふゴシップと云ふか、例の一つに、一日政變の日の手前、彼は駒澤か何處かのゴルフ場でゴルフリングをやつて居つたが、鳩山もたま〳〵そのリングに居つた。近衛が『内閣は案外早く片付くぜ』と斯う云つた。一寸聽き流した鳩山が近衛の言葉を思ひ返して二度聽かうとしたら、矢張り同じことを言つたと云ふのである、――とすれば、近衛は明かに林が結局退却する、而も、その時日が目前にあると云ふことを熟知してゐたのである。近衛の車中談が直接の原因の一つであると云ふのであるが、今一つ、林内閣

の退陣の時機を早めたのが杉山陸相であつた。

陸相は、矢張りこれも九州、大阪方面の軍需工業地帶の視察、徴兵檢査の狀況視察から歸つて來る車中談では『道鏡』の例など引つ張り出して强硬論を吐いてゐたが、いづくんぞ知らん歸京翌日の二十九日の夜秘かに和服で首相官邸に林を訪問し、事態の險惡を說いて首相の善處を促がした。

一見陸相の態度には首尾一貫を欠いてゐる感がないでもないが、……、……、……。……。

かねて軍部では政府が政黨の攻擊の前に屈服した形を執つてはならないといつて支持したやうに見せ、首相自身も亦さう期待し、信じて居つたのに、何故、林に詰腹を切らしたのであるか、この間のデリケートな事情は省略しますが、……。

同時に林内閣後退後の次期政權に就てほゞ見透しが付いたからである。木戸幸一、伊澤多喜男鈴木貫太郎大將、湯淺内府と云ふ風な關係と、政府部内の兒玉、山崎、或は軍の首腦部の間には既に直接の連繫はないが、共通した結論は生まれてゐたのである。

二十九日に……林は、三十日の日に自分を最も支持して呉れて居る鹽野、伍堂の諸閣僚を個別的に自邸に呼んで杉山陸相との會見內容に基いて色々と政局善處策を相談した。それから三十一日の午前の閣議前の九時には、結城藏相が單獨で林首相に會見して、矢張り林から意中を披瀝された。

併し、兎も角午前の閣議は結城が特別議會に臨む豫算編成方針の打合せその他で型通り終つた。それから林は政務奏上と稱して參內した、參內するその時に於ても林としては尙且つ所謂斷行の——凡そ總辭職とは反對の方向に於て善處せんとする決意だけは有つて居つた。杉山の勸告も、重臣方面の動きも、政黨の壓力も、凡て之に反撥してやつて行かうと云ふ越境將軍らしい決意を有つて居つた。

ところが、湯淺に會見すると重臣方面の意向が意外に硬化してゐることを發見した。それから百武侍從長に會つたが、同じやうな態度であつた。

併し、林はまだ最後の活路を平沼に求めて永田町に歸るべき車の方向を西北に向けて平沼を訪問した。併し、重臣方面に於ける林內閣唯一のシンパと目されてゐた平沼までが悟りきつたスゲない態度を示した。平沼との會見で、林は特別議會は斯う云ふ方法で切拔けると云ふ具體

案まで示して諒解支援を請ふたと云ふ說がある、その中に非常最後の手段として民政黨解散プログラムが含まれてゐたと云ふが、どうして民政黨と限つたのか、その理由は深くは分らないが、民政黨と云ふ名前が反國體明徵的である。

民政黨の綱領の中に解散の理由になり得るやうな所があると云ふ風に傳へられてゐるが、果して林に眞實それ程の決意があつたかどうだかは疑問であるし、恐らくそれは林の右翼的支持者の私的建策に過ぎなかつたらしいと思ふ。だから若し述べたとしても、林としては本當にそれをやる意味で平沼に示したのでなくして、斯う云ふとこまで考慮してゐるといふことを捨て臺詞に述べたに過ぎないのではないかと思ふ。

兎も角、賴みの綱の平沼迄に見限られては、林としては最早萬策盡きた形である。遂に歸邸後急遽緊急閣議を召集して總辭職を奏請した。

◇對外策の行詰りと政局不安

以上ずつと表面の動きのアヤだけを取上げて林退陣の經緯を申しましたが、結局、新黨樹立を前提にした七十議會解散の誤算が總辭職を齎らした。從て、次期政權——それは現在私達の

眼前に近衛政權となつて現はれて居りますが、――これは林の倒れ方からして、政黨、軍部、財閥の協力政權と云ふ形體を一應取らざるを得ないし、取るものと豫想されて居つた。

云ひ殘しましたが、林內閣の後退で今一つ注目すべきことは、對外政策の行詰りである。最近對支外交の行詰りにはどんな政權でも逢着せざるを得ない必然的理由はあるが、しかし國內政局の不安定が及ぼす影響については相當軍部及び外務省方面で焦慮してゐた。稅警團と云つて正規兵に近い武裝團體があつて、隨分各地で日本人及び朝鮮人の××××をふん縛つたり北京の膝元では冀東政權解消の聲が起り、國民政府は、關稅低率協定もよいが、北支に於て日本が、軍事的協定に基いて支援してゐる冀東政權を解消し、冀察政權に對する北支駐屯軍の干涉を中止しろと云ふやうな態度を示して居つた。これは國內政局の不安定が原因して居るものとして、かねて出先の軍部は甚だ重要視して居つた。さう云ふ意向が中央の軍部や外交關係者の一部にも反映して來て居つた。

今一つ日英協定、詰まり支那の南北に經濟的勢力範圍を設定しよう、イギリスが北支に於て有つて居る權益を日本に讓渡する代りに、日本は、南支に於けるイギリスの既得權益を尊重する、この壓力で支那のソヴエット化も防げるし、國民政府の民族資本主義國家としての發達が

當然示す反帝國主義的な色彩にも備へることが出來る――といふその日英協定を吉田茂氏がロンドンで折衝してゐたが、これも國內政情の不安から、吉田氏暗躍よりも戴冠式使節として派遣された支那政府の孔祥熙の分裂策動、協定阻碍の裏面工作の方が奏効して、全く行詰つてゐた。

それから又日ソ國交調整問題の如きもユレニフ大使が國境協定の具體案を有つて來たが、どうもうまく運ばない。斯うした外交政策の停頓は結局中央政治を結局强力なものにしない限りは打開困難であると云ふので、斯う云つた對外情勢が林の素朴な政治變革理論の誤算と相俟つて、林の退却の時機を早めた。

そして新黨結成及び對外關係の停頓、と云ふ風な現象が、矢張り林に續く次期政權の形體を一と先づ協力且つ强力政權たらしむるやうに規定して居つた。

その次期政權の擔當者は誰かと云へば、人物本位に考へて、近衛、平沼、宇垣しかない。宇垣の敗退は餘りに生々しい。平沼は相當の可能性はあつたが、樞府議長の地位及び重臣の一部に於ける反對が彼の政局進出の障碍になつて居る。少くとも支配的勢力の間で一致した次期政權擔當者は近衛と云ふことになつた。

◇近衛內閣の成立と組閣の經緯

ところが、近衛は健康の點と、政治的未經驗者である點から、容易に組閣を肯じないと云ふのが一般の定說になつて居つた。私達もさう信じて居つた。

併し、林を倒した重臣方面では、軍にも財界にも政黨にもよい近衛の出馬を可能ならしむるやうな事前工作が深刻に行はれて居つた。それでも萬一近衛が出馬しない場合はと云ふので、湯淺が一日の午前五時に興津に行く時には、近衛を第一候補に、或る武人を第二候補として用意して居つた。その武人は杉山大將であると傳へられてゐますが、若し、近衛がいけなかつた場合には勿論のこと、近衛が受けた場合でも近衛內閣の構成を斯う云ふ風にしようと云ふ原則は既に出來て居つたのである。

それは、一、政民から個人の資格で二名の閣僚を取る。二、林內閣の實質的な繼承者として若干の閣僚を留任させる、これだけは大分前から決まつて居つた。であるから、近衛に大命が下り、又、下る氣配が判つて近衛帷幄の參謀長たる河原田內相が、杉山と一日の午前、午後の二回に亙つて重要會議を試みた際は、既に近衛內閣の第一次的な構成方法に關する打合せが更

らに一歩進んで具體化されてゐたのである。先づ政黨閣僚は二名より各黨一名の割當に限局する。更らに陸軍國防六ヶ年計畫に對應する既定財政計畫を貫徹するために馬場を藏相に再任さす、それが不可能な場合は、馬場財政の忠實な遂行者を藏相に充てる。

今一つ廣田を外務大臣の地位に据えること、これが杉山、河原田の會見に於て約條濟であつた。

勿論、斯う云ふ具體的な話の外に、陸軍が一般的に四ヶ條の要求を出したと云ふことが傳はつて居ります。自發的發表かどうか知りませんが、國民生活安定、政治刷新、國防充實、國體明徵、之を次期政權に要求したと云ふことが傳へられて居ります。これが近衛內閣が出來ればよし、近衛が斷はつて第二候補の杉山になるかどうか、どの內閣になつた場合に於ても、その內閣を構成する基礎條件として先決されて居つた問題であります。

留任閣僚として杉山、米內、鹽野がこの內閣に殘つた。これも併し事前に決定されて居つたことで、近衛發議權をとつたのではない。だから、近衛……、……、……、……、その組閣樣式の半分……考へて居ります。

◇新閣僚の入閣事情と政治的性格

近衛の組閣の狀況を多少個々の顏振れに亘つて申上げますが、陸海軍大臣の留任、先づ陸海兩相留任中、陸相留任に就ては多少問題があります。海軍は陸軍が留任すると云ふので、その交際をしたに過ぎない。海相の更迭は米内自身も希望して居つたところであり、海軍部内に於ても藤田大將が後任に内定してゐた。

しかし、陸軍が陸相を更迭しないと云ふ方針であつたので、海軍も同樣の立前を取つた、次ぎに鹽野の留任ですが、これは御承知のやうに平沼の知遇を受けて居る。平沼派の探題として殘留した。恐らく組閣本部ではその留任を希望しなかつたではないかと思ひますが、これは觀測に過ぎません。しかし或る意味に於て、將來鹽野はこの内閣の爆彈男になるのではなからうかと思ふ。鹽野自身は或は皆川控訴院長などを推薦したかつたかも知れぬが、平沼の熱心な勸告で留任した。新任閣僚として政民から中島、永井が入つて居ります。これは問題はありますまい。唯、永井個人として見れば、外務大臣を希望して居つたやうであります。併し、地位の決定は一に近衛に委せた、近衛は彼に充つるに遞信大臣を以てした。不滿であらうと云ふ評判

も立つて居ります。それから永井、中島の入閣は、當初窃かに二名と豫期して居つた、政民の幹部諸公に、割込み絶望の不滿を持たせ、それがかて〻加へて政黨代表としてゞなく、個人の資格として入閣し、その上黨の機關に持込まず、直接本人に交渉したやうな、例に依つて例の如くの問題から、今現に政民の間に多少異論を起さして居る、近衛内閣に對する政民の協力は必ずしも緊接なものでない。

併し、入閣した代表者はそれ〴〵新黨派の一方の旗頭と傳へられて居る連中でありますし、近衛としては恐らく何らかの成算があると思ひます。

問題は大藏大臣ですが、これは近衛が言つて居るやうに、この内閣の組閣に當つて最も重視して居たのは財政經濟の擔當者である。馬場を藏相に廻すことは軍部の希望であつたが、協力政權としての内閣の規定から言つて、財界の反擊も亦恐れる所でありますから、優先的に内相の地位を與へて、敬遠してしまつた。そしてどの筋から持上つた話か未だに不明ですが、近衛は兒玉に交渉した。併し、兒玉は深井英伍と同じやうな財政意見を有つて居る人のやうに聞いて居ります。

政府の一部では、どうして近衛が兒玉のやうなデフレーショニストに交渉したかと云ふこと

、を疑問視してゐる位です。

兒玉が赤倉から、呼出しを受けて歸る途中、組閣本部から斡旋方を依頼された大久保正金頭取が車中に彼を出迎へて、軍から斯う云ふ要求が出て居る。馬場財政の繼續的な發展を軍は期待して居ると云ふ實情を報告したため、その任に非ずとして、歸京後電話で正式に拒絶した。

說に依れば、後宮軍務局長が途中兒玉を擁して一役演じたと云ふことです。軍としては最後の切札に平生を用意して居つたやうでありますが、結局、財界にその人を得ることが出來なければ賀屋次官を昇格さすより方法がないと云ふことになつた。

賀屋は藤井、黑田系のブロックの一人で、大藏省では高橋、藤井藏相の下で豫算決算課長や主計局長を勤めて令名を馳せた男である。其後馬場の時には、敬遠されて理財局長に遷されたが、結城になつて馬場財政修正の立前から再び次官になつた、斯う云ふ經歷の所有者であり、さう云つた立場の男でありますから、軍では一時相當賀屋の藏相には危懼の念を抱いた。それで梅津が賀屋に會つて、若くは賀屋が梅津に會見を申込んだか、その關係ははつきりしないが兎も角も、兩者會見の結果、軍としても賀屋が軍の要求を受け容れるものとして、强ひて反對しなくなつた。

併し、賀屋と內相になつた馬場との關係は、個人的にも、又、財政政策の上に於ても必ずしも一致しない。その爲に企劃廳總裁を馬場に奪はれては、閣內の勢力の比重から言つても、賀屋としては忍び得ないところであるから、商相に決つた吉野と現在共同戰線を張つた。企劃廳總裁問題では橫槍を入れてゐる。そのため政府では一旦內定した馬場兼任總裁を取消して專ら防協に腐心してゐるが、チョットこぢれたかたちです。若し、瀧正雄が拓務大臣になつて居れば瀧が兼任したものと豫想されて居ります。閣內のまさつを避けて廣田外相が兼任した。

賀屋は自分の所に取るだけの力はありませんから、吉野が商工大臣として企劃廳總裁を兼ねる、賀屋、吉野のコンビで馬場と對抗しながら、財政をやつて行かうと云ふつもりであつた。

この馬場對賀屋吉野の關係は軍が馬場を支持し、財界が又結城財政の繼承者としての賀屋をバックする限り、一旦、梅津、賀屋の關係に於て了解が出來たと云つても、早晚何らかの對立を起すのではないか、鹽野の留任と同時にこの二人の關係は相當注目されて居ります。

廣田の外相は、先程も話しました通り、既にこの內閣の出來る前から要求されて居つたことでもあり、近衛自身としても切に欲して居つた所であります。

近衛の抱懷する政治的イデオロギ——は、抽象的に革新性を帶びてゐるといふだけで一般に

は具體的に傳へられて居りませんが、外交に關する限り、大體、廣田的なイデオロギーを有つて居ります。

彼は、國策と云ふものは政治家の決めるべきものであつて、軍部はその政治家の決めた國策に從つて國防計畫を立つべきである。併し、政治家がお互に黨利、黨略にのみ走つて居るから軍部がやらなければならぬやうになる。

今日、必要なのは有機的に統一的に國策を立てることであつて、外交政策の如きも、無方針の協調政策は排するが、同時に機械的な自主外交ではいかぬ。相手に得心が行くやうな方法に於て積極外交をやるべきであると云ふ持論である。廣田が自主でもなく、追隨でもなく、協和外交だと云つたのとほゞ軌を等しくしてゐる。從て、廣田を閣僚に入れたと云ふことは、近衛内閣としては非常な强味でありますが、廣田としても二・二六の直後に近衛が大命を拜辭した爲に自分にお鉢の廻はつた關係もあり、近衛の懇請には應じないわけにはゆかなかつたのであります。誰が考へても、廣田が外相に就任することは、男前を上げることにこそなれ、格下げとして非難するわけはないのでありますから、これは近衛、廣田の相方にとつて收穫の一つであつたやうであります。

その他の閣僚中、安井英二は近衛首相と親友でもあり。同窓でもあり、文相の位置を獲得したが、これは實質的に閣内にあつて近衛の參謀格として活躍するでせう。

内務省畑に育つた新官僚とでも言ひますか、相當將來があるものと豫てから噂せられて居ります。謹嚴な男ですが、併し、薄い感じのする弱さがあります。個人的な批評とか、入閣の徑路と云ふことも、裏話と云へば裏話のやうなものゝ、餘り大したこともないのでこの邊で止めます。

◇近衛内閣の運命と財政々策

問題は、近衛内閣が若し破綻を起すとしたら、どう云ふ點で起すか、私としては財政經濟の行詰りが一つと、軍部間の動向が一つ、この三つの點を重視して居ります。

國防六ヶ年計畫と云ふのは、中膨みの菱形になつて居つて、今後三年位の間に陸海軍と合せると四十億近い豫算になる。限りある蓄積資本をもつてしては餘程之を計畫的に配分しない限り、國防豫算に廻つて公債となり、その豫算消化の爲の企業資金となり、更に資源開發の爲に對滿投資となると云ふほどの資金調達は困難であります。從て、勢ひ惡性インフレにならざる

を得ない。こゝに物價騰貴の社會不安が先行する。

これも結局、世界的の現象の一部と言ふ學者もありますが、世界的に軍擴をやつて居ると云ふ共通な理由の外に日本資本主義の特質の一つである重工業資源の海外依存性からも影響されてゐる。多少は物價騰貴の跛行性はあれ、全體としての騰貴率も最近では消費部分に入つて來て、相當深刻なものがある。

增稅とか國際收支の改善で賄ふ餘地もない。だから公債を增發して强制的に公債を財界に保有さすやうな何等かの統制案を出したとしても、地方に於て公債の市場自由賣買が許されて居る限り、到底、公債價格を維持してゆけない。自由賣買を禁止すると云ふところまで統制を持つて行くことは、技術的な計畫とか、平穩な統制政策でなく、最早や一つの政治變革である。——斯う云ふ政治變革が、各方面の勢力の協和と云ふ客觀的な事情を有つて生れて來たこの內閣の手許に於て實行されるものとは容易に想像が付かない。

從て、計畫經濟とか何とか言つて居りますが、政府のやる統制には限度がある。無條件な國防豫算作出を中心に、財政政策をやつて行く限り、僕はその破綻は案外手近にあるではないかと思ふ。

これが人の關係に於ては、或は閣內に於ける先程言つた、賀屋、馬場と云つたやうなものゝ對立になつて現はれるでせうし、新黨運動に對する反射的な、政民の動向とも關聯して、色々な政治問題を生んでくるのではなからうか、政策の行詰り、政策の實行の行詰りと云ふことはこれから五、六年の間どんな政權をも、等しく短期、短命ならしめる宿命的な課題であり、必然性を有つて迫つて居ると思ふ。

◇軍部の動向

今一つの軍部內部の動向問題ですが、今日のやうな社會的動搖期にあつて、然も軍部が政治的指導權を把握してゐる限り、國防本位の反デモクラチツクな上からの强權的支配は相當社會的反撥を受ける。陸相なり、これを補佐する首腦部は現實にぶつ付かつて統制の困難なことを知るが、下の者程觀念的である。勿論昔のやうな內部的對立はなくなつて、その意味の肅軍工作は完成されてはゐるが、政治性を帶びた軍部が、この社會不安の影響下にあつて示す姿態は必ずしも單純ではない。林內閣の組閣當初に惹起した板垣問題を想起するとき、杉山が一番先きに組閣本部に赴いて留任したと云ふことは相當含蓄のある問題である。

◇新黨問題の二つの行き方

最後に近衛内閣と新黨問題に觸れることにします。近衛内閣が果して新黨を組織するかしないか、組織すれば與黨を有つことになるが、しかし新黨を組織する爲に、永井なり、中島なりが强ひて黨を分裂に導いて行く方法を取ることは、嘗て、林が取つたと同じやうな轍を踏むことになつて、非常に危險性を有つて居ります。

矢張り、國民的な動向、主張と云ふものに、既成政黨と云ふものは、或る程度制約されて居る、機械的な親軍黨とか、ファッショ的な新黨を、分裂を賭してまで作らうとしても、その黨は選擧の度毎に先細りになつて行く、それだけの制壓力が國民の間にあるが、唯、政民が現在の形で、極めて議會的なファッシズムをやつて行くと云ふことになつて來ると、又、さう云ふ方向は、先程、林内閣の末期に於て、政民とも軍に對するゼスチャーとして示したところでもあるが、さうなつて來ると、一寸新黨の餘地はない。

むしろ政民合同の方向に行く可能性が强くなる。勿論、その上に近衛が据ると云ふことも考へられます。だから近衛が新黨を組織するとしても、その行き方が二つある譯で、政民兩黨に

挑戰して分裂を起さしめ、對蹠的に新黨を組織するか、或は出來るだけ全體を巧妙に自分の持つて居る指導原理で以て統合して行くかと云ふ方法論的には、二つの行き方がある譯ですが、二三の政府部内のブレーンと云はれて居る連中の意見では、新聞の傳へて居るやうに、政民に直接挑戰して、閣内に入つて居る連中を入質に新黨を作ると云ふことは考へてもないやうである。

さうすれば、今日、近衛が聲明したやうに、出來るだけ國内の相剋を廢して協力で行く、さう云ふ方向で行く以上、若し新黨を作るとしても、その方法論は全然林内閣のとつた手段とは相違してくる筈である。右翼新黨と云ふものと、社大黨の進出と云ふことも問題にはなりませうが、これは當面の政局に餘り深い影響は有りません。

（六月四日・記）

◇編輯だより◇

◇林内閣倒壞と近衛内閣成立の眞相に就て、首相官邸詰の都新聞の精鋭を煩はして一冊にまとめました。

◇既刊『最近の軍部を語る座談會』は、パンフレット編輯に新機軸を出したものとして、非常な好評を受けて居ります。生きた情報と事實を知つてゐる人々が、座談のうちに披瀝するものこそ、他の雜誌や新聞では知ることの出來ないニュースがあつて、讀者に參考と資料を與へ興味あるものであります。

◇『今日の問題』臨時增刊第三號は、六月十五日に發賣になります。政變の眞只中にあつて、編輯しただけに、全誌が生々として、内容も充實したものであります。毎月賣切れの好評で、情報雜誌として、特異な存在を示して居ります。御愛讀下さい。

◇パンフレットは毎月三冊以上發行します。全國の驛賣店書店で發賣して居りますが、地方で賣店に御不便な方は、本社直接御購讀の便宜があります。ハガキで御申込になれば、新刊から御送り致します。

◇毎月月報を發行して居ります。御入用の方は、ハガキで御申込になれば、何人にも無代にて進呈します。

裏から見た林の沒落と近衛内閣の成立
(No. 99)
定價十錢

昭和十二年六月十二日印刷
昭和十二年六月十六日發行

(不許複製轉載)

著者 伏見武夫
發行者 伊藤隆文 東京市芝區田村町四丁目十八番地
印刷所 三陽堂青野印刷所 東京市芝區田村町四丁目二番地
發行所 今日の問題社
東京市芝區田村町四丁目十八番地
電話芝(43)三〇〇七番
振替東京五九七四八番

東京鐵道局公認 鐵道保養會(鐵道各驛ホームスタンド一手販賣)
鐵道弘濟會・鐵道授産會
森田書房・富田報英堂
東京堂・大阪屋號(滿鮮)
新正堂(京阪神一手販)・川瀬書店(名古屋)
菊竹金文堂・大坪惇信堂

大取次

◇今日の問題社パンフレット◇

陸軍パンフレット 經濟戰略・思想戰略 價一〇 送三
補公研究會編 密寶大楠公の遺訓書 價一〇 送三
高橋是清著 處世一家言 價一〇 送三
永松淺造著 豐太閤の處世術 價一〇 送三
松下芳男著 林銑十郎と眞崎甚三郎 價一〇 送三
菅原節雄著 陸軍の智腦九人男 價一〇 送三
金子堅太郎著 日本憲法の精神 價一〇 送三
松下芳男著 川島義之と渡邊錠太郎 價一〇 送三
小林順一郎著 軍部と國體明徵問題 價一〇 送三
小林知治譯 ジヤクソン式强體健康法 價一〇 送三
松下芳男著 荒木貞夫と阿部信行 價一〇 送三
長谷川了著 裏から見た歐洲の外交戰 價一〇 送三
小泉二十著 外交陣をめぐる軍部と外務省 價一〇 送三
久原房之助著 國體宣揚と重臣ブロック 價一〇 送三
經濟問題研究會編 サラリーマンは何處へ行く? 價一〇 送三
三島康夫著 日支衝突必然論 價一〇 送三
石山賢吉著 金持に學ぶ 價一〇 送三
高橋是清著 半生の體驗 特二〇 送三
藤原銀次郎著 產業日本の進路 價一〇 送三
牧野元次郎著 人生金儲け修業 價一〇 送三
長谷川了著 急迫せる日ソ關係 價一〇 送三
三島康夫著 日露再び戰ふか 價一〇 送三
永井三郎著 現代軍部論 特二〇 送三
矢野恒太著 人生學第一課 價一〇 送三
齋藤二郎著 ソ支共同抗日戰 價一〇 送三
天沖鄕扇著 日ソの危機を探る 價一〇 送三
野村重太郎著 新官僚の陣容を語る 價一〇 送三
松下芳男著 宇垣一成と南次郎 價一〇 送三
三島康夫著 赤軍の全貌 特二〇 送三
永松淺造著 池田成彬傳 特一〇 送三
多署壯一郎著 貴族院改革問題 價一〇 送三
牧野元次郎著 食ひはぐれなき人生 價一〇 送三

◇今日の問題社パンフレット◇

- 池上五郎著 實說二・二六事變 價一〇 送三
- 小林順一郎著 新經濟國策の提唱 價一〇 送三
- 黑川修造著 惑星久原房之助 價一〇 送三
- 菅原節雄著 陸軍の巨頭を語る 價一〇 送三
- 片山哲著 無產黨は何を求むるか 價一〇 送三
- 小林一三著 產業は國營にすべきか 價一〇 送三
- 神田孝一著 軍部の國策全貌 價一〇 送三
- 喜多壯一郎著 英雄に何を學ぶか 價一〇 送三
- 布施秋著 歐洲の不安とスペインの動亂 價一〇 送三
- 野村重太郎著 寺內壽一と肅軍の動向 價一〇 送三
- 青木新著 スペインの革命を語る 價一〇 送三
- 齋藤三郎著 支那怖るべし 價一〇 送三
- 菅原節雄著 傑將・眞崎甚三郎 價一〇 送三
- 喜多逸郎著 增稅は脅威か福音か 價一〇 送三
- 中野正剛著 支那をどうする 價一〇 送三
- 伊達圭介著 日本に何が迫るか 價一〇 送三
- 山崎靖純著 排日の支那を視る 價一〇 送三
- 伊達圭介著 軍部と行政機構改革問題 價一〇 送三
- 永井了吉著 政黨亡國論 價一〇 送三
- 三島康夫著 日獨はなぜ同盟したか 價一〇 送三
- 齋藤直幹著 軍部の產業政策 價一〇 送三
- 長谷川了著 世界に於ける赤露の暗躍 價一〇 送三
- 中村常三著 支那はどうなる 價一〇 送三
- 神田孝一著 軍部イデオロギーの新展開 價一〇 送三
- 野田豐著 惡性インフレに備へよ 價一〇 送三
- 石龍子著 觀相人物評論 價一〇 送三
- 菅原節雄著 杉山元と小磯國昭 價一〇 送三
- 膨田貞次著 日本のインフレーション 價一〇 送三
- 新井肅人著 馬場財政から結城財政へ 價一〇 送三
- 菅原節雄著 板垣征四郎と石原莞爾 價一〇 送三
- 輪井英武著 仕事に有りつく法 價一〇 送三
- 山浦貫一著 失はれた政權（政治小說） 價一〇 送三

◎既刊書御注文は、すべて前金にて御願ひ致します。御申込は本社直接又は最寄賣店へ。御送金は振替又は郵便切手のこと。月報『今日の問題』『新刊通知』『直接購讀規定』御入用の方は御申出下さい。
◎本社發行の總目錄御入用の方はハガキで御申込み下さい。

◇今日の問題社パンフレット◇

- 菅原節雄著 政局の轉換と新勢力の擡頭 價一〇 送三
- 小汀利得著 我が經濟の動きと株式界の前途 價一〇 送三
- 大平遂一著 支那に於ける列國の爭覇戰 價一〇 送三
- 首相官邸記者 政變の切迫と次期政權を語る 價一〇 送三
- 陸海軍記者 最近の軍部を語る座談會 價一〇 送三
- 伏見武夫著 林の沒落と近衛內閣の成立 價一〇 送三

◇今日の問題・パンフレット直接購讀規定◇

一、今日の問題パンフレットは時局に急速に對應して問題と事件の眞相を正確に解說報導して讀者に正しい時局認識を與へんとするものであります。

二、毎月三冊以上發行しますが、發行日は一定して居りません。

三、全國の驛賣店書店で發賣して居りますが、賣店に御不便の方又は發行の都度購讀を希望せらるゝ方のために直接購讀會を組織して本社直接の御申込みを受けます。普通會員と特別會員とがあります。

四、普通會員には毎月三冊以上、一ヶ年四十冊を配本し　會費は一ヶ月三十五錢、半ヶ年二圓、一ヶ年三圓五十錢であります。

五、特別會員には一ヶ年五十冊以上配本し、更に月刊雜誌『今日の問題』を送本致します。會費は一ヶ年六圓であります。

六、會員には毎月一回、本社機關紙を無代送呈します。

七、會費拂込は振替、爲替、集金郵便等御便宜の方法で結構であります。

八、一冊づゝの御註文は定價に送料を添へて切手代用で本社へ御申込下さい。

九、十名以上會員を募つて御申込の場合は本社の支部として特に御便宜があります。支部規定は別にありますから御申出下さい。

◇今日の問題社・特別出版◇

本社出版の單行本は、他社のものと比較して内容、頁數から見て約半額の最低値段の特價にて全國の書店にて發賣して居りますが、品切の節は直接本社へ御便宜の方法で御注文下さい。

野田經濟研究所長 野田豐著 **軍部と財界**
準戰時下に於ける日本軍部の動向と財界の諸問題を解說したもの。
特價八十錢 送料六錢

海軍少佐 齋藤直幹著 **戰爭經濟讀本**
大軍擴時代に於ける日本經濟は如何に統制されて行くか。戰爭經濟とは何か。
特價八十錢 送料六錢

野村重太郎 他三名共著 **軍部と轉換期の政治**
軍部に關するもの無刊パンフレットを合して一冊にしたもの。
特價六十錢 送料六錢

戸坂潤著 **現代日本の思想對立**
日本に於ける思想は如何なる動向をたどるか、フアツシヨか、共産主義か？
特價六十錢 送料六錢

齋藤二郎著 **支那をめぐる日ソ英米**
最高權威の機關を動員した最新の調査による情報書
特價五十錢 送料四錢

牧野元次郎 他三名共著 **人間を作れ・金を作れ**
本社に於て既に發行したパンフレットのうち處世修養に關するもの六を合して一冊としたもの。
特價六十錢 送料六錢

鈴木茂三郎著 **日本財閥の解剖**
日本の大小財閥の組織内容、系統、人物を調べ上げた新研究の書
特價五十錢 送料六錢

三島康夫著 **赤軍の新研究**
赤軍に對する最近の調査研究の書として專門家、軍人必讀の書
特價八十錢 送料九錢

熊崎健翁著 **姓名判斷と改名法**
どうしたら姓名で運勢が分るか。どうしたら良名に改名出來るか。
特價三十錢 送料六錢

不動貯金銀行頭取 牧野元次郎著 **私の處世法**
一代で日本一の大貯蓄銀行を造り上げた牧野氏の興味深い處生學。
特價八十錢 送料九錢

近刊豫告

野田豐著 **戰爭と財産**
四六判三百頁 上質紙・上製 價壹圓 送料十二錢

陸軍大佐 小林順一郎著 **日本主義政治の原理**
四六判二百五十頁 上質紙・並製 特價八十錢 送料九錢

菅原節雄著 **軍部の中心人物**
四六判二百五十頁 上質紙・並製 特價八十錢 送料九錢

製劑者自らの體驗によつて發明
せられた淋病三方療法の公開!!

淋疾治療界に歡喜

發明者小川友三先生

私が茲に御すゝめする三方療法が『なるほど、これなら良い」といふことが御わかりになつたら、迷はず、今から此の療法を試みて下さい。必ず確信が持てゝ明朗な氣分になられます。

淋病三方療法は、發明者たる藥劑士界の先輩小川友三先生が、自ら淋病にかゝつて、治療した貴重なる體驗によつて苦心研究の結果、發明創製せられたもので、日本はおろか、世界中に唯一つしかない最初の合理的療法であります。世に淋病療法、淋藥多しと雖も、製劑者自らの體驗を告白して、責任を負ふて發賣されたものは、我が三方療法(登錄濟)の他に絶對にない。かつて主婦之友誌上で推奬せられ、商工省、後援海外輸出團より指定輸出淋藥となつた光榮を有して優良藥となつたのも亦本劑のみであります。

この療法一たび發表せらるゝや各方面より非常なる好評を受けて、遠く海外をはじめとして多數の全快禮狀が來て居ります。(こゝでは紙面の都合上其手紙を公表出來ませんが、御希望でしたら說明書に掲載してありますから御申込になれば進呈します。)

福音來る!! 三方療法とは何か?

三方療法

- 内服藥
  - 錠劑(ヒポンノー錠)　藥効を倍加し排尿を多くして殺菌目的を達す
  - 漢藥(煎藥ルーゾンジ)
  - オガターゲン座藥
- 尿道藥
  - 注入藥(注入器付)　急性慢性に用ふ
  - 座藥用スベリ藥　男子用、女子用あり
- 濕布帶
  - 濕布藥　局所の濕布は黴菌を絶滅
  - 濕布帶　局所殺菌淋菌の繁殖を防いで治療を速かならしむ

上記の圖解を見れば、何人も「これなら確かだ!」と御諒解になるでせう。内服藥、尿道藥、濕布藥何れも發明者が苦心研究し自己の體驗上より、これならよい、との確信の下に製劑したもので、これ等を或は内服と利尿により、更に局所尿道座藥により共上局所外部よりの濕布により、あらゆる手段をつくして淋菌の絶滅に手をつくす療法として、これ以上の方法はない。

現在販賣せられてゐる藥劑、療法は何れも、片手落療法で、活應困難な淋病が一方的療法で治るものではない。

即刻本療法を試みて明朗な人生を得られよ!

◇御註文は當所直接前金又は代金引換にて御申込下さい。個人名で密送します。前金は送料不要です。

◇御申込次第說明書無代進呈します。

急性、慢性淋病の理想的短期療法は、まさにこれだ! これだけ行屆いた治療法は他に絶對ない。如何なる淋菌も、この三方よりの撃滅に逢つては、死滅するより外にない。

高貴藥七種類揃一箱入りがこの安い値段!

別製
- 一週間分　十六圓
- 二週間分　十一圓
- 三週間分　十五圓

特製
- 一週間分　十圓
- 二週間分　十九圓
- 三週間分　廿五圓

別製は慢性急性に用ふ
- 一夫婦引用　十圓

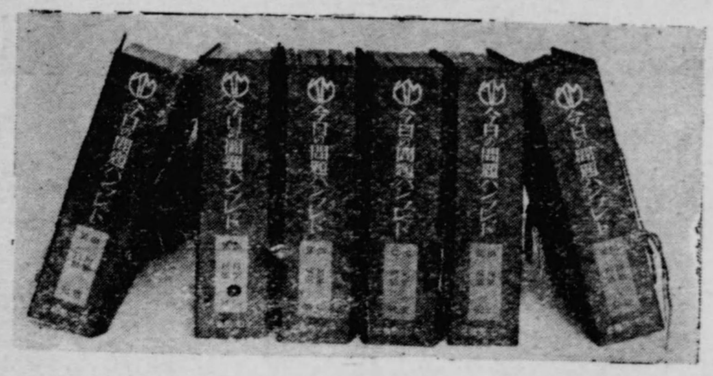
東京市・芝公園九號地
發賣元　日本藥學研究所
振替東京五八四八九番
電話芝三二四四番
製劑所　三方療法研究所
責任藥劑師　小川友三先生

375
255

パンフレット保存用 綴込カバー（十綴五冊込）

總クロース・金文字入
綴込用紐付・美麗

定價金三十錢（送料不要）



パンフレットの愛讀者各位の御希望によつて、本社で綴込み表紙カバーを創案しました。

一組十五冊綴込みにて、上等クロースを用ひた堅牢なもので體裁頗るよく、順次發行のパンフレットを綴込んで保存して置くのに便利であり、書架に納めても立派な装飾となり、時局エイサイクロペーディアとなつて、各方面より大好評を受けて居ります。

希望者には實費にて頒布しますから前金で本社へ。

發賣元 東京市芝區田村町四の十八 振替東京五九七四八番 **今日の問題社**

＝愛讀者サーヴイス＝

本社の機關新聞

『今日の問題普通號』を

何方にも無代進呈す！

希望者はハガキで本社へ直接御申込み下さい。

毎月一日發行の四六四倍六頁新聞型の機關紙は、一名豆新聞の異名を以て呼ばれるものです。いろ〳〵な面白い記事あり讀者欄あり、新刊紹介あり、各方面より申込殺倒しつゝあります。今すぐ御申込あれ、毎月無代進呈！

時局雜誌

今日の問題

六月號

特輯・臨時增刊號

六月十五日全國一齊發賣

▼近衛内閣成立の經濟……赤木貞一郎
▼林内閣没落の實相……野村重太郎
▼近衛内閣に豫想さるゝ運命…矢部周
▼海軍の中心人物を語る……古澤磯次郎
▼日本新興五財閥の全貌……岩井良太郎
▼金の現送と爲替の問題……野田豊
▼日本ファシズムの展望……伊達圭介
▼スペインは其後どうなつてゐるか板倉進

情報と解說と評論・生きた雜誌！

即刻讀め！ 全國驛賣店、各書店にあり

毎月一回十五日發行定價十三錢（送料一錢）
半ケ年六冊七十八錢（送料共）
一ケ年十二冊一圓五十六錢（送料共）

東京市芝區田村町四の一八
振替東京五九七四八番 今日の問題社